

家庭画報 2004 7

家庭画報

2004

7

夏、情緒ある涼しい暮らしを

宝塚を語る

世界文化社



涼し、暮らしを

夏、情緒ある

伝統の夏道具で涼しく
酒肴膳を、ひんやりと
風流ゆかた遊び

扇千景・榛名由梨・大地真央

語る 宝塚を

夢を紡いだ九〇年

昼膳・エステ・贅沢ステイ特選情報

ホテルを楽しむ

別冊付録

画聖・川合玉堂が
愛した里を歩く
こだわりの美味
夏の贈りもの

光と暮らす

3

案内人／植田 実
撮影／本誌・大泉省吾

日時計の家

豊里邸(沖縄県)

陽射しが強烈な沖縄の地では、伝統的に、軒を深くし光をできるだけ遮るという家づくりがなされてきました。

また、バリアフリー住宅では、段差や階段をなくし、すべてをフラットにする、というのが常識です。

これらの常識をくつがえし

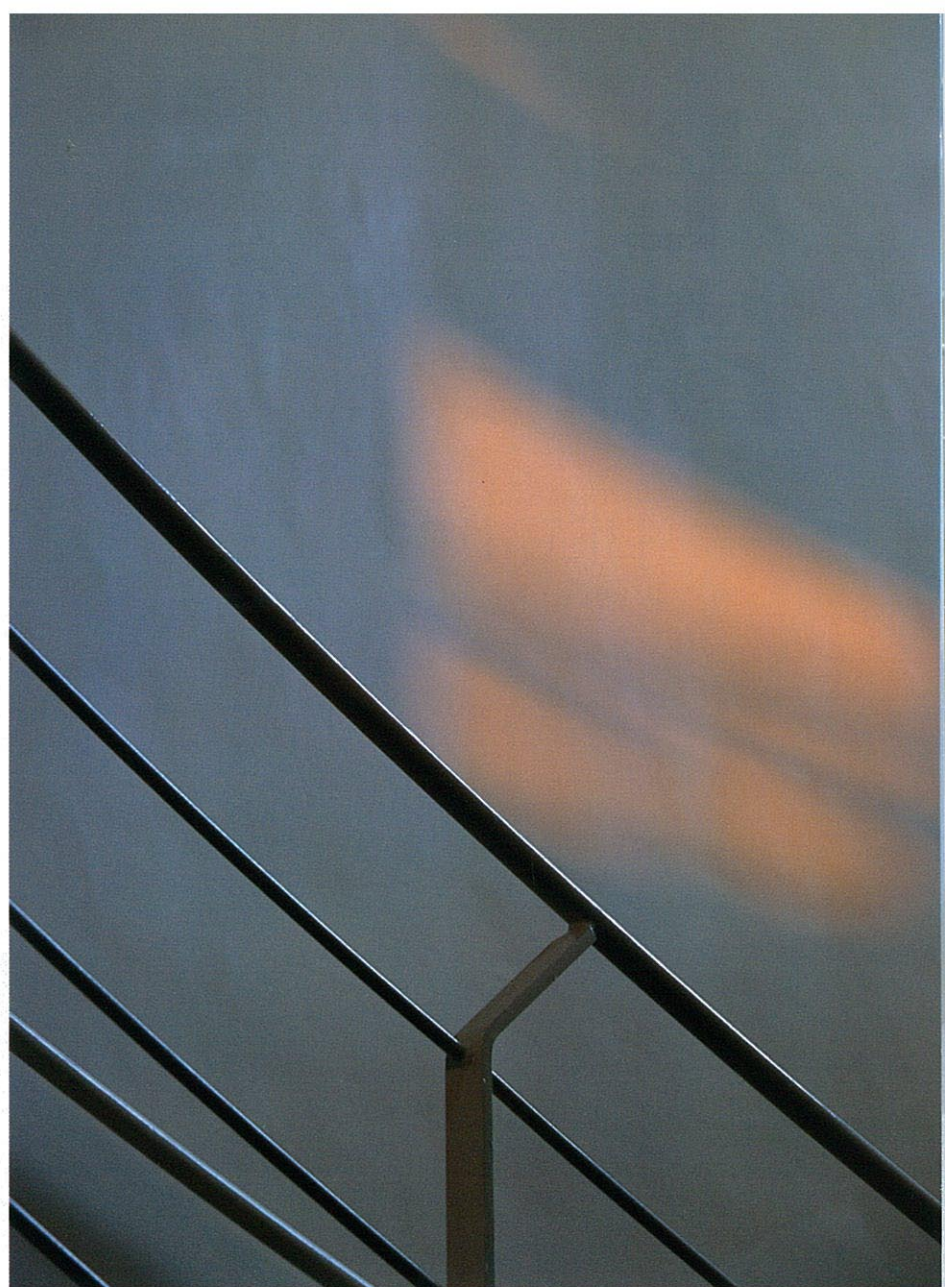
陽光が日時計のように室内を巡り、階段が優美な曲線を描くこの家に、バリアフリーの新しいかたちが見えてきます。

高低差が4mある土地に建つ豊里邸を低地から見る。
この家の中心となるホールは、船のような優しい楕円形。
壁に開けられた右上の窓からは陽光が、角度を変えながら室内に届く。
外壁・内壁ともに白く塗装されている。①
※末尾の番号はP.296の図面の番号に対応し、写真が撮られた位置・向きを表します。

右上・階段の手摺りと壁が美しく光を受ける。
 白い壁に、赤い夕陽が映る。②
 右・低地から見た外観全景。③
 下・高地から見た外観。どちらとも道路に面す。こちらが表玄関となり、最上階に展望室の窓が見える。手前は駐車場となっている。④



下上・展望室から低地方向を見る。Ωのような形が、ホール天井のトップライト。右横に接続している箱は和室。和室の天井は屋上の形そのままに四角錐形に突出している。⑤
 下・3階展望室内観。左手にエレベーターがある。毎朝ここに上り、朝日を眺めるのが建て主の習慣。⑥



わかる住宅ではなく、多くの人々が訪れる楽しい家をつくらう、という福村さんの思いが込められています。土地の段差をそのまま生かし、高地と低地を大空間の吹き抜けと美しい螺旋階



を消し忘れたかと思った」ほど明るい室内。朝、目覚めるとリハビリを兼ねて階段を上り、三階の展望室へ。それぞれの階層から、一日三回の日の出を楽しむのが日課となりました。

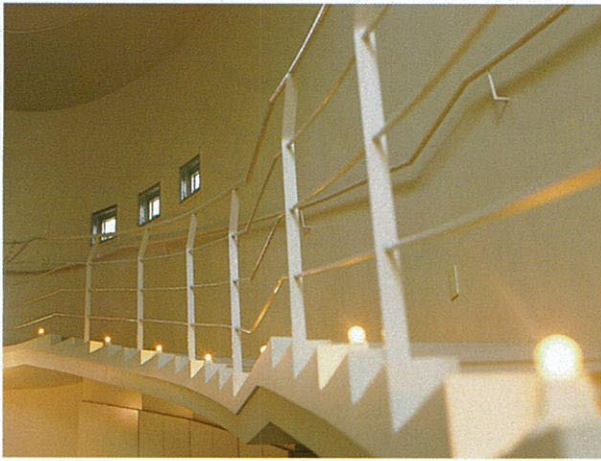
この家は、沖縄に建つバリアフリー住宅です。建て主の豊里さんは一八年前、病に倒れ、半身不随となりました。「家づくりは生きていくために必要なこと。段差があつては生活できないのですから」と豊里さん。四階の高低差があるこの地に家を建てることと決めたとき、まず考えたのは、低いほうの土地を持ち上げて、フラットな平屋建てにすることでした。ですから、チーム・ドリームの福村俊治さんの図面に「階段がある」ことにとっても驚いたそう。そこには、一見してバリアフリーと、

段、ホームエレベーターで繋がりました。また、強烈な陽射しに悩む沖縄の地で、トップライトと大きな窓の採用が試みられています。これは「あまり外出できない建て主が、室内にいても自然を感じられるように」という意図から。光が角度を変えながら日時計のようにホールを巡り、白い壁が光の色の変化を映して室内に自然の進行を伝えます。ただし、真夏の太陽は強烈に目を射るため、カーテンが必要な時期もあります。この家で迎えた最初の朝、寝室からこのホールに出たとき「電気

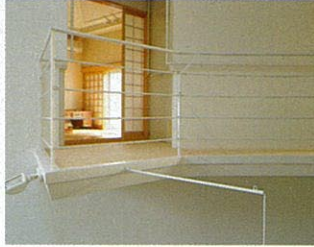
「陽光が、かけがえのない「自然」を室内に運ぶ

2階にあたる表玄関からホールを眺める。右手は和室に続く。
トプライトと正面の四角い窓から入る陽光が
ホールの湾曲した白い壁に光のグラデーションを映す。
一段ごとに室内の風景が変わって見える優美な階段は
段差10°と緩やかな勾配、下りたところがホールになる。⑦





右・階段にも床と同じ
ジュート麻が敷いてある。⑧
下・2階和室の前に吹き抜けを
見下ろす小さな場所が
張り出されている。⑨
左・ホールから階段を見上げる。
規則的に並ぶフットライト。⑩



実用のための手摺りが描く きれいなライン

「機能性だけでなく、家の中でいかに楽しく過ごすかを考えたい」という福村さんの言葉に、これからのバリアフリー住宅の可能性が見えてきます。

リハビリ用の階段は、不自由なほうの足が上る高さに合わせて、蹴上げ一〇センチ。その緩やかさが、螺旋階段を一層美しくしています。目立ちすぎぬよう、壁と同色の少し細めの手摺り。出入り口に必要な垂直の手摺りが出入り口上部をゲート状に巡り、横ラインの手摺りに続いて心地よくカーブを描いています。有機的な形の造り付けのキッチン・ダイニングテーブルでは、椅子に座ったまま、ほぼすべての作業をすることができると、手がかりとして建て主の移動を助ける役割も果たします。

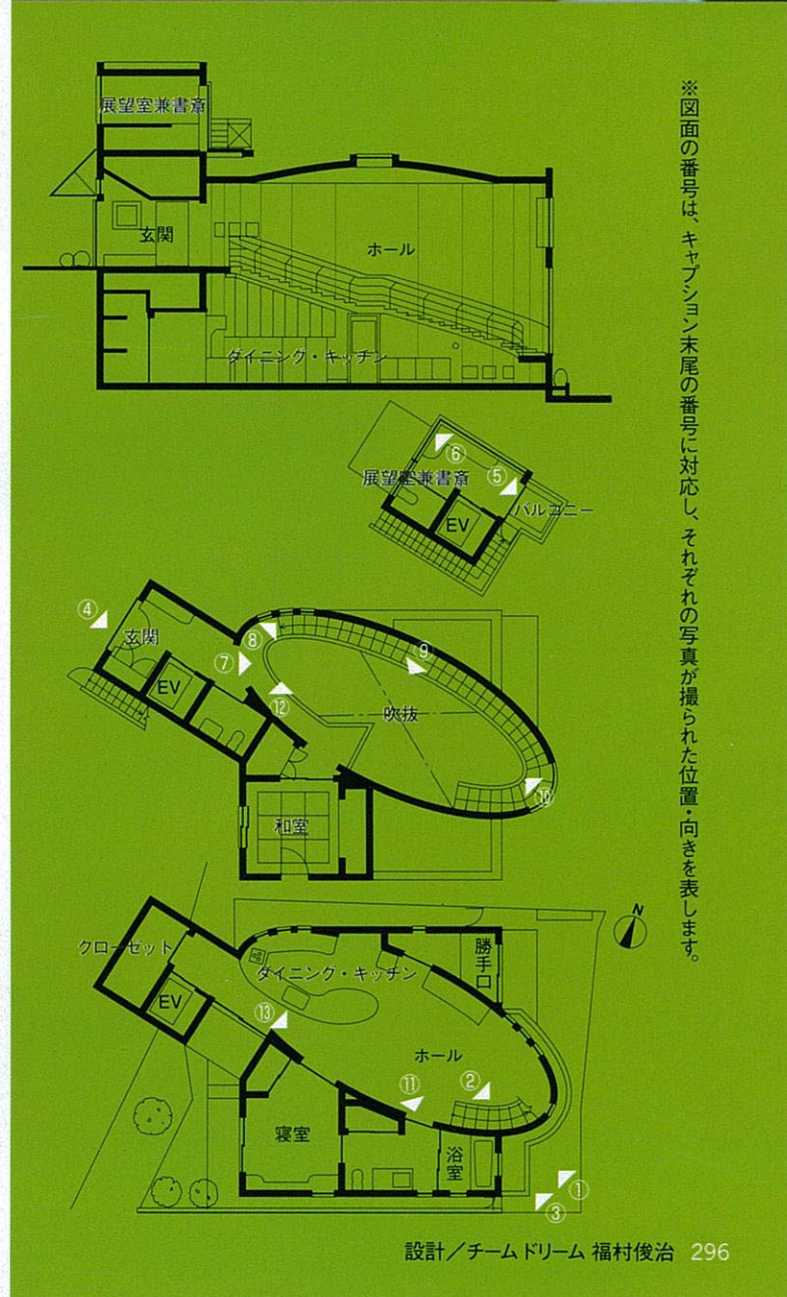


右・垂直の手摺りは、必要なものとして、建て主から要求された。⑪
左・クッキングヒーターは楕円の長径の先に位置する。⑫

案内人よりひと言

バリアフリー、つまり段差を極力なくす家を必要とする住まい手にとって、もっとも必要なのは階段であるという、いわば逆説的な構想で設計された住宅です。4メートルほどの高低差のある敷地を生かして1、2階にそれぞれ入り口を付ける。1階は徹底したバリアフリーの床で、寝室から水まわり、ダイニング・キッチンから仕事のコーナーまでスムーズに動けます。2、3階へはホームエレベーターを使う。このように各フロアの機能をまとめたうえで、もうひとつボーナスとして1、2階を緩やかな階段で結びつける。この空間を楕円形^{わまぎく}でまとめたことで、階段は傍役どころではなく主役に転じます。住まい手が元気に生きていくのを見守り、助ける役割です。彼女を訪ねてくる大勢の客にはベンチともなり、あるいはただじっと眺めているだけでもいい。階段を？ いや光を。天窓と曲壁が光を言葉に変える。光は生命の言葉です。

植田 実 (編集者・建築評論家)



※図面の番号は、キャプション末尾の番号に対応し、それぞれの写真が撮られた位置・向きを表します。

食器棚、流し台、食卓、調理台が一体化した
造り付けのキッチン・ダイニングのカウンター側から
ホール全体を見上げる。右側は、手前から掃き出し窓、
寝室、バスルーム。階段壁ぎわの手摺りは、
それぞれのドアの上部にゲート状に連続する。
実用とデザインを連続させたともいえる。
この家は、設計者により、「相互扶助」を意味する
沖縄の言葉で「ゆいまーる」と名付けられている。⑬

